

第3回

「荻窪の記憶」

こぼればなし

洋間と生垣

「商店街から一步、住宅街に入ると和洋折衷の文化住宅が並んでいた。どの家も庭があり、生垣に囲まれていた(『郊外の文学誌』)」。阿佐谷で育った作家・川本三郎が書いているように、大正末から昭和にかけて生まれた郊外住宅地の景観をつくっていたのは和洋折衷の住宅と生垣でした。

みなさんは、荻窪の住宅街を歩いていて、玄関脇にちょっと凝った窓のある洋風の小部屋を見かけたことはありませんか。窓の内側は、椅子とテーブルが置かれた「洋間」で、応接間兼書斎として使われていました。戦前に流行した和洋折衷の住宅の象徴です。

一方、緑の景観という点では、生垣が大きな役割を果たしていました。当時、生垣によくつかわれた植物にカ



南荻窪にある築83年の住宅。出窓もサッシに替えず、本来の姿が保たれている。



ラタチがあります。北原白秋作詞の童謡「からたちの花」は、「からたちの花が咲いたよ。白い白い花だよ」とはじまりますが、二番では「からたちのとげはいたいよ」、そして三番では「からたちは畑の垣根よ」と歌われており、カラタチの鋭い刺が人や動物の侵入を防ぐことから畑の垣根に使われていたことがわかります。カラタチの生垣は、元は麦畑や大根畑だった郊外住宅地の出自も語っていたのです。

「荻窪の記憶」を蘇らせてくれる「洋間」と「生垣」ですが、いまでは貴重なものになりつつあります。



生垣のある家も少なくなり、カラタチの生垣は見つかりませんでした。

(「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男)